

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 25 年 5 月 31 日発行 第 23 号

観光客を増やして復興へ

宮城県が 21 日に発表した、2012 年の観光統計概要によると、県内の観光客入込数は前年比 19.2%増の 5144 万人でした。各地で東日本大震災の影響で中止となった行事・観光施設が再開されたことなどで増加したようです。ですが、2010 年に比べると 84%の観光客入込数にとどまり、震災前の水準には達しませんでした。

観光客入込数は全ての地域で前年に比べて増加しました。ただ、震災前の 10 年比では仙南圏域で 2%増となった一方、震災の被害が甚大であった石巻圏域では 44.2%減と、地域間で回復の状況に差がみられます。

宿泊客数も前年比で全ての地域で増加しました。ですが、宿泊施設の復旧が遅れている石巻圏域では 10 年比 27%の水準にとどまりました。

足元でも着実な回復傾向が続いています。県が実施したサンプル調査によると、今年 4 月の観光客入込数は前年同月比で 12.6%増。4 月に始まった大型観光企画「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン」(以下 DC)の効果が出ているようです。

DC のような地域の観光キャンペーンは、広域的に行われないと実効に乏しいとして、県レベルで展開されるのが主流のようです。私が通学で使用しているミヤコーバスでも、車外広告でキャンペーンを PR しているバスをよく見かけられるように「仙台・宮城 DC」も、県全体でキャンペーンを PR する姿勢が見られます。

キャンペーンでは、伊達なバス旅と題して、県内の各市町へのバスツアーが実施されています。石巻は、「復興へ！被災地の今を知る、まなびのツアー」など、10 近くのバスツアーが盛り込まれています。仙台・宮城 DC は、6 月 30 日までですが、伊達なバス旅・バスツアーで石巻を訪れた観光客が、周りの人たちに石巻の魅力を話し、口コミによって、キャンペーン終了後も観光客が増加するのではないかと思います。

また、最近では「B 級グルメ」と呼ばれる低廉な食品が注目されています。各地でガイドブックに B 級グルメの情報と、そのグルメの有名店を紹介しているようです。石巻には、石巻焼きそばという全国的にも知名度が高い B 級グルメがあります。石巻を観光で訪れた際、本場の有名店で石巻焼きそばを食べることが、旅行をより豊かにするのではないのでしょうか。なので、石巻駅および駅近辺で、石巻焼きそばをもっと前面に出して観光客に PR しても面白いと思います。

それから、ある地域が、映画やドラマなどの舞台になると観光旅行者が増加するという現象が以前からよくあるようです。海外では、映画「ローマの休日」が、ローマの魅力を世界に宣伝したように、地域の魅力を、視

覚を通して多くの人たちに訴える映画の宣伝効果は大きいと思われます。

石巻も、太平洋戦争前後を背景に孤児がお菓子に憧れ生きる希望を見出すまでを描いた映画「エクレール・お菓子放浪記」で、撮影の舞台となりました。この映画は、震災前にロケを行ったので、震災前の石巻の貴重な風景を見ることが

できます。映画に映る石巻の風景と、今の石巻の風景は異なるかもしれませんが、この映画を観て、石巻を訪れたいと思った人も少なからずいたと思います。今後も、石巻が撮影の舞台となる映画やドラマが出てくることを期待したいです。

観光においては、交通機関の利用割合も気になることです。観光旅行で利用した全ての交通機関についての調査(観光概論/2006 年)によると、自家用車が 46.1%で最も多く、貸し切りバスが 24.3%、JR が 23.2%と続きました。1964 年には自家用車はわずか 8%で、鉄道が 72.8%であったので、劇的に変化したことが分かります。とはいえ、現在でも、電車は大きな交通機関であります。仙石線の完全な復旧にはまだ時間がかかるようで、このことが石巻の観光に少なからず影響を与えられ、仙石線の早期の復旧が待たれます。

観光旅行者が地域を訪れると、宿泊をし、食事をし、地域の交通機関を利用し、様々な施設を訪れ、土産品を購入するので、地域にお金が入ります。観光旅行者の消費分だけその地域が潤うことになります。DC 終了後も、積極的にイベントを開催するなどして、石巻へ多くの観光客を引き寄せることが、石巻の復興への大きな足がかりとなるはずです。

(稲垣雅也)

ナイル・エチオピアと東北の復興

2013 年 4 月 20 日、石巻専修大学にてナイル・エチオピア地域と東北の復興と銘打った公開シンポジウムが行われました。日本ナイル・エチオピア学会が石巻専修大学に集まり、同学会主催の下公開シンポジウムが行われました。シンポジウムではナイル・エチオピアと東北の復興について講演が行われました。ナイル川と北上川が姉妹河川提携をしていることが、背景にあります。

エチオピアでの災害は主に人災で、内戦により 22 年間の長期間無政府状態で、平和になってもムラ(共同体)に帰れない無数の民がおり、教育サービスも十分でないため教育サービスも充実させる事が必要だとのこと。もっとも必要なことは、平和になっても帰れないスーダンの民には心の支援をすることだと考えます。

一方、東北の女川の災害は主に天災で津波によるものであり、人的被害は 827 名うち死亡が 483 名に上りました。エチオピアと女川の目指す急速な復興という目標



にたどりつくためには住民の意見や意志を重視した行政サービスや取り組みが必要です。

そうした支援によって急速な復興を遂げるために、鍵になることは一方的な物資の支援ではなく一緒に行動し復興に関する政策の立案と決定は住民主体で行う事だと思います。スーダンのかかえる問題のバラバラになった(ムラ)共同体の住民の心の問題や女川の抱える人口の流出の問題を解決するために、やはり住民が主体になって政策の立案と決定を執り行わなければいけないのでしょう。そのためには被災した住民たちの繋がりを密にすることが大事だと考えます。

そのつながりを密にする手段の例としては、NPO 法人ロシナンテスの関上や名取市・亘理町における復興支援事業が紹介されました。今回の学会で大島一馬さんの紹介して下さったロシナンテスの活動ではスーダンの方に日本にきていただき、関上で運動会を行ったりまた仮設住宅に住むご高齢者同士の集まる機会をつくったりすることなどがあげられます。

スーダンや東北の迅速な復興を目指すためには、一方的に続ける支援ではなく一緒に考え行動する仕組みを作ることこそが、復興に関する政策の立案と決定を行う流れを生み出すことにつながり、ひいては被災地の復興につながると考えます。

(小久保敬太)

ウェルカムフェスタ 2013 in 石巻

5月9日(木)、石巻港の中島埠頭に客船「ふじ丸」が来航しました。それに伴い石巻港では歓迎イベント「ウェルカムフェスタ 2013 in 石巻」が開催されました。

このイベントは石巻港大型客船誘致協議会が実施し、地域で活動している方たちや、私たち石巻専修大学の生徒や教員も参加し行われました。

主なイベントの内容としては、本会場で石巻市・東松島市・女川町・松島町の観光PRコーナーが開かれ、それぞれの町の魅力を旅行客の方にPRする貴重な場として盛り上がりを見せました。

石巻専修大学では、(株)今野梱包製作の礎展示、石原ゼミのサバだしやきそば提供、庄子ゼミの石巻復興写真展、清水先生ご指導の震災語り部を用意しました。

私たち、丸岡ゼミでは日和山で喫茶室と作品ギャラリーを兼ねた「工房かざみどり」を運営していらっしゃる鶯出孝子さんを講師に招き、シャドーボックスの制作・展示を行うブースを用意しました。

シャドーボックスとは紙に描かれた模様や絵の切り抜きをコピーし貼っていき、物の表面を飾り、平面の絵に影を持たせ、準立体的に見せる手法です。

シャドーボックスの絵の題材としては、石巻にゆかりのある人物で、かつ今年が伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節の400周年目であることから支倉常長が選ばれました。

当日はブース内に多くの方がたちよりシャドーボックスを見学していき、支倉常長の慶長遣欧使節の400周年の



事実を知り関心を示していました。

今回のウェルカムフェスタでは、昨年行われたウェルカムフェスタの時よりもより復興に近づいた石巻市の状態を多くの方に見てもらうことができました、このようなイベントを通して、多くの方に被災地の状態を見てもらい関心を誘うことは石巻の復興のヒントになるのではないかと今回のイベントを通して私は思いました。

(吉城翔太郎)

石巻ふねのアート展

東日本大震災で甚大な被害を受けてから、私は石巻の人々の「生き様」について考えてきました。海と川のそばに住めば時折このような被害があるにもかかわらず、ここに人が住む理由はなぜか、考えたのです。また、震災後、ガイド役を務める機会が幾度もあったため、外部に伝える石巻のまちの特徴を考えてきました。この二つの問いへの私の共通の答えが、「ふねのアート」です。

なぜここに住むのか、簡単に答えれば、生活の維持に便利だったから、ということになると思います。石巻は古くから漁業が活発で、北上川を使った舟運、貞山運河を用いた舟運の拠点として栄えてきました。海と川のそば「ふね」を使う仕事が多く、その仕事にかかわる人々が形作ったまちだからです。いわば、「ふね」とそれを取り巻く生活が石巻の人々の「生き様」です。

次に、このまちの特徴は何でしょうか。あまり知られていませんが、私は美術をあげたいと思います。

石巻はもともと美術が活発なまちです。戦後まもなく、教育者・画家・文筆家・政治家の太宰惇さん(1899-1991)が始めた日曜写真会には、多いときで300人もの子供たちが集まり、日和山で油絵を描いたそうです。その結果、昭和33年には、河北美術展で教え子11人が洋画の部で入選を果たしたのです。絵画展での成果はほかにもありますが、さらに、その後、太宰先生のお弟子さんたちが市内で絵の教室を開催し、プロの美術家などを輩出するという、大きな成果をあげてきました。

さらに、漫画家の石ノ森章太郎(1938-98)の縁により、石巻には石ノ森萬画館が作られました。彼が少年の頃、石巻の岡田劇場を訪れて映画を見た経験を持っていたためです。宇宙船(=「ふね」)のイメージで作られた萬画館も、石巻のアートとなっています。

このまちの特徴を伝える方法として、私は「石巻ふねのアート展」の開催を呼びかけています。今年2013年は、支倉常長がサン・ファン・パウティスタ号に乗り、メキシコ経由でヨーロッパへ出帆した年です。常長が再び日本に帰るまで、7年間を要したそうです。石巻にはこの木造帆船の復元船が展示されています(修復中)。

支倉の使節400周年を機に、石巻の特徴を「ふね」と「アート」でPRするのが、「石巻ふねのアート展」の目的です。市内外で作られた「ふね」のアートを紹介する展示会を7年間続けよう、という呼びかけです。

400年前の支倉の出帆も、慶長の津波の2年後だったと言います。石巻の人々の生き様は、昔から波を越える「ふね」とともにあったのだと思います。今後アート展が広まり、石巻の人々の元気にもなれば、幸いです。

「石巻ふねのアート展」の賛同者・協力者を募ります。

(丸岡泰)